

ケニア

2013 年 9 月 7 日～20 日

京都大学農学部地域環境工学科 1 回生 福田健太

本当に楽しかった。

帰ってきて 1 週間ほど経つが、このケニア滞在が夏休みで一番楽しく、最も充実していたということは疑いようが無い。今回参加して良かった、と心の底から思う。

このスタディツアーに参加が決まってからの数週間、私の胸の内には様々思いが渦巻いていた。やっと海外に行ける！いや、会ったことの無い人と行くのか・・・ いや、自分と同じような志をもった人と出会える！しかも、行先は前々から関心のあったアフリカのケニアだ！いや、でも腹壊したりしないかな・・・ ホームステイとか大丈夫だろうか・・・ なんか物騒な事件に巻き込まれたりはしないだろうか・・・ いや、旅行では絶対できないことが体験できる！ とこんな具合に期待と不安が入り乱れていた。

そして、あっという間に夏休みが過ぎ、私は出発の日を迎えた。ケニアへの道のりは長かった。仁川、バンコクと二回も乗り継ぐ航程は、飛行機に乗り慣れていない私にとってなかなか過酷だった。ほぼ 24 時間かけて、ついにナイロビのジョモケニヤッタ空港に降り立った。それからの 14 日間、車から見た景色、訪れた場所、食べたもの、出会った人、全てが今も鮮明に頭の中に残っている。

やはり、最も思い出深いのは、エルドレットでの 4 日間である。ここでは、現地のユースグループ「FIST」のメンバーたちに本当に良くしてもらった。「FIST」とは「拳」という意味で、民族の垣根を越えて様々な活動に取り組んでいる。エルドレットでやったことといえば、まず土のうによる道直しの手伝い。土のう袋に土を入れる、土のうを運ぶ、ジェンベで土を掘り起こす、土のうを並べる、コンバクターで地面を固める、どれも予想以上に力を要する作業で、手伝いをしたというより体験させてもらったという感じになってしまった。エルドレットの人たちは男も女も強かった。そして、何より彼らは CORE のスタッフ抜きで、自分たちだけで作業をしていた。これが「自分たちの道を自分たちで直す」ということか。方法を教わり、あとは自分たちで行うというやり方は、技術協力と呼ぶにふさわしいと実感した。また、スケジュールには無かったが、FIST の計らいでエルドレットの Hearing impaired school と Special school for the intellectually challenged にも訪問することができた。子どもたちは人懐っこく、私たちの側に寄ってきてくれた。本当にかわいかった。さらに、もう一つスケジュールには無いイベントがあった。それは・・・、現地のディスコに連れて行ってもらったことだ。ちょっと不安もあったものの、行ってみると本当に楽しむことができた。ケニアの人は皆が踊るのが大好きと聞いていたまさにその通りだった。しかし、実際のところ、その

日一番踊っていたのは、ケニアの人では無く一緒にスタディツアーに参加していた山本さんだった。また、ディスコのディスプレイに **Welcome friends from Kyoto university** と出るというサプライズを受けたとき、私のテンションは最高潮に達した。ディスコという旅行では訪れることの無い場所からケニアを見るという貴重な体験をすることができた。エルドレットでの 4 日間、磯部さんと私を迎えてくれたホストは Nancy だ。彼女とその姉妹 Marcy, Sheilah と寝る前にチャイを飲みながら談笑したのは決して忘れることは無いだろう。温かい布団のあるベッドを、朝と夜にはおいしいチャイを、シャワーのときにはお湯を提供してくれ、さらに洗濯までしてくれるという歓待をしてくれた彼女たちには感謝しかない。エルドレットでのホームステイの最終日の朝、FIST のメンバー一人一人からのメッセージを聞いているとき、4 日間の楽しく、充実した、快適な生活と彼らの優しさを思い出して、思わず泣きそうになった。涙をこらえるのに必死で、途中から何を言っているのか聞き取れなくなってしまった。それほどまでに、エルドレットでの滞在は楽しかった。FIST の Joseph, Franklin, Nancy, Mohammed, Emily, Sharon, Paul, Lilian Asante sana!!

その他にも、マトマイニチルドレンズホーム、マサイマラ国立公園（サファリとマサイの村）、そしてマザレスラムを訪れた。これは、訪れたどこでも感じたことだったが、フレンドリーで明るい人が非常に多い。マトマイニの孤児たちやスラムに住む人々も例外ではない。暗い目をした人が全然いないのだ。それがケニアに来る前との一番のギャップであった。そして、エルドレットやマザレスラムは住民同士の結びつきがナイロビと比べ強いように感じた。日本と比較しても同じことが言える。GNH 国民総幸福量の構成要素の中にもコミュニティ、他者とのつながりは含まれている。上下水道、電気、ガス、道路といったインフラをはじめとする環境面で日本は圧倒的に恵まれている。しかし陳腐な言葉かもしれないが、「豊かさはお金の多寡に依らない」ということは本当だと自分の目で見て感じる事ができた。コミュニティ、他者とのつながりが幸せと結びつくという意味でも、住民みんなで道直しをするというのはとても良い取り組みだと思う。

さて、冒頭でも述べたが、このスタディツアーに大学 1 回生の夏に参加できて本当によかった。たくさんの人と出会い、たくさん場所を訪れ、たくさんの刺激を受けて、帰ってくることができた。ケニアが好きになった。たった 2 週間で、ケニアのことを全部分かるわけが無いが、良いところも悪いところも少しは感じる事ができた。しかし、良い悪いという評価もあくまで日本人という立場からの偏った考えにすぎないのだろう。例えば、スラム。私は今まで、スラムと聞くと「仕事の無い人で溢れる無法地帯」というようなところを想像していた。しかし、実際には非正規であるものの手に職をつけ、商売をしている人がいる。学校もあり、子どもたちは元気に手を振ってくれる。現地に行ったからこそ、本当の姿を見ることができる。テレビ、新聞、本などでは分からない発見があった。このことだけでもスタディツアーに行った意義があったと思う。

最後に、

スタディツアーに参加する機会を与えて下さった木村先生、ミーティングを始めとして事前準備を手伝って下さった酒井さん、ケニアで大変お世話になった松本さん、本庄さん、CORE 現地スタッフの皆さん、マトマイニの菊本ファミリー、貴重なお話をし
て下さったカメラマンの山下さん、院生の大東さん、そしてツアー中ずっと仲良くして
下さった坂野さん、石井さん、磯部さん、山本さん

本当にありがとうございました。皆様のおかげで、大変充実した日々を過ごすことが
できました。今回のスタディツアーで、学び、感じ得たことを大事にして、これからの大
学生活を送り、更に飛躍したいと思います。



Eldoret Hearing Impaired school で

生徒たち、ユースグループ FIST
のメンバーたちとの集合写真



言葉だけがコミュニケーション
の手段ではないと、身をもって
実感した。やっぱり、ケニアの
子どもはかわいい。



ケニアの主食ウガリ（特盛）

帰国後、Franklin に
“I miss ugali!!”とメールしたら
この巨大な写真が送られてきた。
Emily 家とマトマイニのウガリ
はおいしかった。



マサイ族との写真。ちょっとぼ
られたがそれもいい経験。ナイ
フ類やライト、ライターなどを
持っていけば、もっといい買い
物ができたかな・・・



FIST のメンバーを始めとして、
ケニアの人は好奇心旺盛だった。
質問攻めされることも多々あつ
た。もっとリスニング力があれ
ば、もっといろんな話ができた
な。これを糧に語学力も磨かな
ければ。



マトマイニでの一枚。遊び足り
なかった。もっと仲良くなりた
かったな。次訪れたとき、成長
した彼らに会うのが楽しみ。